

氏名(国籍)	金 賢 貞 (韓 国)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博 甲 第 4191 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	現代日本社会におけるローカル・アイデンティティー －「歴史の里」石岡の近現代と地域文化－		
主 査	筑波大学教授	博士(文学)	真 野 俊 和
副 査	筑波大学助教授	博士(文学)	中 込 睦 子
副 査	筑波大学助教授	博士(文学)	風 間 計 博
副 査	筑波大学助教授	博士(文学)	伊 藤 純 郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は茨城県石岡市を研究対象地とし、当該地域における歴史とその地域認識の態様を、様々な角度から論じようとしたものである。石岡市は茨城県から「歴史の里」としての指定をうけているように、古代以来の歴史を背負ったとされる町であり、対外的にも古い歴史と文化の町というイメージを発信しようとしている。このような自己地域像がいつ、何故に、誰によって形成されたのか、そして現在の地域文化が「歴史」をめぐるどのような状況にあるのか、という問題の解明に取り組むことが、本論文の意図である。全体は序章、終章を含めて7章から成っている。

「序章」では、上記の問題意識にせまるための、主として理論的な検討を行った。著者は欧米における文化人類学や社会学等の議論を援用しつつ、文化、民俗、伝統などという概念が決して自明のものでなく、歴史のなかで常に解釈されなおしてきたものであることを論じた。

第1章「石岡の歴史の変遷と町の現在－石岡における近代以降の社会変動と町づくりの現状を中心に－」では、主に文字資料に基づいて石岡の歴史および現状を概観した。石岡は古代に国府がおかれて以来、近在地域の中核都市であり、近世には醸造業を基盤に大きな経済発展をとげていた。近代以降もその状況はかわらなかったが、第2次大戦後には首都圏へのベッドタウン化が進行して、総合的な地盤沈下の情勢におかれた。このような近世以降の石岡の社会・政治・経済的な変遷を検討することで、地域の歴史と文化にアイデンティティを求めようとする現在の石岡を考察する上での歴史的背景を整理した。

第2章「歴史の町石岡の『郷土像』の形成とその意味－昭和の郷土運動としての『石岡史跡保存会』の活動を中心に－」では、昭和初期に結成された「石岡史跡保存会」の活動を取りあげ、郷土史の研究者たちによって形成された地域像の検討を行った。この会の主要な活動に史跡・遺跡の調査・発見・保存や、先人たちの顕彰運動があった。昭和初期における彼らの活動をとおして、「古都」「史都」石岡という郷土像が見出され、形づくられ、意味づけられていったことが明らかにされた。

第3章から第5章までは、おもに2001年から続けてきたインタビューや参与観察などのフィールドワークデータにもとづく議論が展開された。すなわち現在の石岡に住む人々の実践をとおして、そこにどのような地域像を見出すことができるかを検討しようとした。

第3章「石岡における伝統文化の再編成－無形民俗文化財と『石岡囃子』という新たな民俗芸能の創出－」では、無形民俗文化財という中央による権威づけシステムを活用することで、「石岡囃子」という新たな民俗文化を創出してゆく実践に注目し、その過程を考察した。石岡近在の各集落には各地名を冠した囃子が伝承されてきたが、石岡市総社宮の祭礼が整備されるにしたがい、そのうちのいくつかは依頼されて毎年の祭礼に参加するようになってきた。一方ある特定の人物の働きかけによって連合保存会が結成され、「石岡囃子」という名称が生まれてきた。こうした動向のなかで石岡囃子は無形民俗文化財として県の指定を獲得したのであるが、それとともに、祭礼だけでなく他の各種イベントにもしばしば招待されるまでになった。筆者は在地の素朴な芸能が「民俗文化財」として一種の権威を確立するに至る過程と、それにともなう諸現象を明らかにした。

第4章「『歴史の里』石岡の伝統文化とともに生きる人たち－常陸国総社宮大祭／石岡のおまつりの祭礼組織を事例に－」では、現在の石岡に焦点をあわせ、地域のなかで生まれ受けつがれてきた総社宮大祭という伝統文化と、どのように向き合っているか、また祭りにどのような役割と意味が担わされているか、という問題を論じた。本章では祭礼の伝統の中心的部分を担う年番町（旧町内）と、新しく総社宮大祭に参加するようになった非年番町（新町内）という二つの対照的な町内を具体的な事例として取り上げた。新町内は現在では町の中心部にある旧町内を経済的にはしのいでいるものの、新町内の祭りへの対応のなかに「伝統」へのきわめて強い指向性を見てとることができた。

第5章「都市祭礼の重層的構造と現在の意義－石岡を表象する常陸国総社宮大祭／石岡のおまつりの変遷を中心に－」では、明治以降の祭礼の変遷のなかから読み取れる、祭礼の存在意義を論じた。今日の総社宮大祭の原型は明治中期に遡るが、その後いくつかの画期を経由して、1970年ごろより行政との関わりを深めるようになった。すなわち従来の神社と氏子町内によって担われる私的な祭礼から、市当局や観光協会が関与をつよめ、公金が投入されるとともに、名称も「石岡のおまつり」と呼ばれるようになったのである。旧来の氏子区域の外にあって新興のベッドタウンからの参加がみられるようになり、市全体の祭礼としての色彩を強めてきたのである。新町内の参加は旧町内との間に一定の緊張関係をもたらしたが、さらに外部から神輿を担ぐ集団が介入し始めることによって、また別の緊張関係が発生した。石岡の祭礼はこうしたダイナミズムのもとに、地域結集の核としての役割を果たしていると、筆者は論じている。

終章「現代日本社会におけるローカリティ、ローカル・アイデンティティ」では再び序章の問題設定にもどって、理論的な考察を行った。本研究は具体的には石岡の経験した種々の社会変動のプロセスや結果、郷土史家たちの実践やその意味、いわゆる民俗芸能の伝統文化としての創出、石岡のローカル・アイデンティティの中核を占める伝統文化としての総社宮大祭の変遷や実践などをとおして、「古い歴史と文化」とか「伝統」といった表現の意味内容を検討してきたのであるが、それは単純かつ常識的な意味合いで片付けられるものではなく、積極的な再解釈や行政と住民たちの共同作業によって、不断に構築されつつあるものと意味づけられると主張した。

審査の結果の要旨

以上本論文は、石岡という地域の詳細なフィールドデータに依拠しながら、地域文化や地域アイデンティティなどの概念に対し、根源的な検討を加えようと試みた意欲作といえる。その学術的意義は次の二点に集約される。

第一は、対象地域の歴史に関する深い考察である。常陸国総社宮大祭をめぐる調査と研究は、歴史をさかのぼるだけでなく、祭礼が外部世界へ広がってゆく今日の状況にまで目配りがおよんでおり、祭礼発展のための活力の源が解明されたといつてよい。そればかりでなく祭礼周辺の状況、たとえば新たに参加するよう

になった新町内をめぐる状況や、芸能を担当していた農村部集落の役割とその位置づけに関する変遷などは、祭礼研究では通常看過されがちな事項であっただけに、筆者の視点の斬新さが浮き彫りになった。

第二は、対象地域の歴史を相対化する視点により、地域という概念そのものがどのような過程を経て成立してきたのかが、追究されたことである。第2章で扱われたいわゆる郷土史家たちの目に、石岡という地域がどのように映ったのかという問題は、単に石岡地方史に関する研究史にとどまらず、それ自体が歴史的考察の対象になりうることを示す結果になった。

ただし本論文からさらに考察を深めなければならない問題も残されている。序章・終章で論じられた、文化人類学や社会学の諸理論を援用した議論は、なかなか重厚なものではあるが、こうした検討が石岡という具体的な地域への研究にどのように適用されればよいのか、という点に関してはもう少しバランスのとれた目配りが必要のように思われる。それにもかかわらず筆者の6年におよぶフィールドワークとその理論的検討は、地域研究という営みそのものを相対化させる視点を含むだけに、重要な問題提起になり得たといえる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。